

## 研 究

父の親性（親であること）と  
母の育児負担感に関する研究

森 永 裕美子

## 〔論文要旨〕

父の親性（親であること）がどのような構成因子であり、その親性因子と母の育児負担感との関連について明らかにするため、1歳6か月児健診対象の父母1,462人の調査で有効回答分767人を、父の親性項目23項目と基本的属性、母の育児負担感尺度（中嶋他1999）にて母の育児負担感を測定し、確認的因子分析・共分散構造分析によるパス解析を行った。

父の親性因子として、16項目4因子【役割遂行への不適応感】、【役割期待への負担感】、【人間的成長・責任感】、【児に対する親和性】があり、父の【役割期待への負担感】が強いと、母の育児負担感も強くなる傾向で、これらの因子間で因果関係や相関関係を有しつつ、父の親性因子は、母の育児負担感に関連していた。

Key words : 父の親性, 役割, 母の育児負担感, 1歳6か月児

## I. 緒 言

育児不安を抱える母や不適切な育児をしている母への適切な対応は地域母子保健の重要課題の1つである。近年の少子化、核家族化や家族形態の変化に伴い、育児のあり方も問われている。少子化対策や次世代育成対策推進法に基づく計画的な取り組みも始まり、父の育児参加が重視され、少しずつ父親の育児参加もみられるものの、平成18年に発表された「第3回全国家庭動向調査」の結果では、未だに8割が育児は母の役割であった<sup>1)</sup>。

また、育児不安・育児ストレスなどによる問題や乳幼児虐待の表面化・多重発生によって、「育児」に関わる「大人」としての「父親」や「母親」に影響を与える環境要因・価値観・ストレ

ス認知についての研究が多くなり<sup>10,11)</sup>、「母親」への影響因子や欠落要因・必要要因を明らかにすることが先行した。

「父親」に関しては、母親がストレスを緩和して育児ができるための間接的な因子として取り上げられてきている。母の育児不安の軽減には父親の“子どもを風呂に入れている”などの手段的・精神的の物心両面からの育児参加や<sup>5,7)</sup>、夫婦間のコミュニケーション度合いが影響し<sup>8,12)</sup>、父および夫としての果たす役割が重要とされていた<sup>13)</sup>。近年では、父親自身に焦点化した研究がみられ、育児ストレスや抑うつに関する報告がなされるようになった<sup>10,11,14,15)</sup>。加えて、男性性と父性性の関連から見た父親の役割の検討では、父性が育児に影響を及ぼし、その父性は男性性を含む自己像や夫婦関係から

A Study of Paternity and the Burden of Child-raising Perceived by Mothers

Yumiko MORINAGA

倉敷市保健所（保健師）

別刷請求先：森永裕美子 倉敷市保健所 〒710-0834 岡山県倉敷市笹沖170番地

Tel : 086-434-9800 Fax : 086-434-9805

[2181]

受付 09.11. 9

採用 10. 6.11

影響を受けること、自分の親との関係が父性を通して間接的に育児に影響すること、夫婦関係は間接的に育児に影響を与えることを明らかにしていた<sup>16)</sup>。しかしながら、父の「親であること」がどういうものであるかということについては、妊娠・出産期において明らかにされつつあるが<sup>16,17)</sup>、幼児期ではまだ明らかになっていない。

子どもの成長発達の面からいうと、1歳6か月の頃は歩行を始めとして、運動機能や社会性の発達が特徴的で、子どもの自我の芽生えが著しく親の思い通りにならない時期である。母親がこのような状況において育児負担感や育児ストレスを感じるようになるのは否めない。父の母に対する「子育ての大変さを理解している」といった精神的な支援や入浴や排泄、悪いことをした時に子どもをきちんと叱るといった手段的な支援が、母の育児負担感や育児ストレスの緩和に必要な重要であるが<sup>4,5)</sup>、父の親性との関連性はあまり明らかにされていない。さらに母の育児負担感の緩和に関与する、父親自身の親であることの意識、あるいは認知を扱った研究はほとんど見当たらないのが実情である。

親性については、日本において1990年以降から取り上げられてきた概念であり、「生物学的な性にとらわれない親としての一般的な性質」や<sup>18)</sup>、「原語は父親役割、母親役割の総称で、現在は子どもの保護・養育に際して親が発揮する心性と行動を意味する」と言われている<sup>19)</sup>。父性・母性と親性を違う概念と捉えた時、妊娠期から乳幼児期における父性および母性に関する研究は多数あるが、親性に関するものは十分とは言えなかった。子どもを育て、家族としての1つのコアとしての集団になるためには、父・母の役割、夫と妻の役割と関係性を絡め合うことが必要である<sup>8,9,12)</sup>。父にどのような認知があれば、「父の育児参加」に関与し、母の満足感が得られ、母の育児負担感の軽減につながるのかを検討することにより、父と母の両方に通じる育児支援策、父親教育プログラムの検討・導入、さらには虐待予防のリスクアセスメント項目としても今後の対応が可能と考える。

## II. 研究目的

本研究では、1歳6か月児をもつ父の親性(親であること)の因子構造を探索し、その親性因子と母の育児負担感との関連を明らかにすることを目的とした。

### 用語の定義

#### 親性(親であること)

親になることを「子どもをもち養育していく過程で役割や意識を獲得していくこと」と捉え<sup>20)</sup>、夫婦関係を基盤とし、自律性、親和性、責任感、負担感などの感情を伴いながら親になることによってもたらされる個人の人格的特性であるとした(以下、親性という)。

## III. 研究方法

### 1. 調査対象

K市(人口476,075人/2006年7月末現在、出生率人口千対9.6/2005年9月末)の市民で調査期間中(8~11月)の1歳6か月児健康診査対象児(2005年1月生まれ~4月生まれ児)をもつ父母1,462人。

### 2. 調査方法と時期

#### 1) 調査期間

2006年8月~11月。

#### 2) 調査方法

- (a) 配布方法: K市保健所長の許可を得て、1歳6か月児健康診査の受診案内およびアンケート郵送時に調査票・返信封筒を同封し配布した。
- (b) 回収方法: 研究担当者が健診会場に出向き、健康診査等に支障をきたさないよう回収ボックス等を用いて回収した。

### 3. 調査項目

質問紙は、対象者の属性(父母の年齢、職業、子どもの出生順位等)と父の親性(親であること)検討用の23項目(以下、親性項目とする)と母に関する「母の育児負担感尺度」から構成した。

#### 1) 父の親性項目

及川<sup>20)</sup>の「親性発達尺度」(6因子40項目)、岩田<sup>14)</sup>の父親役割への適応における「ストレス

測定尺度」(5因子27項目)を参考に,研究者独自の項目を加えて23項目とした(表1)。この項目を「全くそう思わない」,「あまりそう思わない」,「まあそう思う」,「非常にそう思う」の4件法とした。

## 2) 母の育児負担感尺度

中嶋他<sup>21)</sup>の「母の育児負担感尺度」は母親の児に対するネガティブな感情と育児に伴う母親自身の社会的活動の制限に関連した内容を測定することができ,信頼性・妥当性が確認されている(表2)。この尺度は「まったくない;0点」,「たまにある;1点」,「時々ある;2点」,「し

表2 母の育児負担感尺度(中嶋他1999)

| 質問項目 |                                                      |
|------|------------------------------------------------------|
| Y 1  | 子どもの世話のためにかなり自由が制限されていると感じることがある                     |
| Y 2  | 子どもの世話が自分で責任を負わなければならない家事などの仕事と比べて,重荷になっていると感じることがある |
| Y 3  | 子どものために自分には望ましい私生活(プライバシー)がないと感じる                    |
| Y 4  | 子どもがいるために,趣味や学習,その他の社会活動などに支障を来していると感じる              |
| Y 5  | 子どもとのかかわりで,腹をたてることがある                                |
| Y 6  | お母さんが子どもにやってあげていることで,報われないと感じることがある                  |
| Y 7  | 子どものやっていることで,どうしても理解に苦しむことがある                        |
| Y 8  | 子どもとのかかわりの中で,我を忘れてしまうほど頭に血が上ることがある                   |

表1 親性検討項目(23項目)

| 質問項目 (□は逆転項目を示す) |                                |
|------------------|--------------------------------|
| X 1              | 私は,子どもへの愛情が深いと思う               |
| X 2              | 私は父親であることを楽しんでいる               |
| X 3              | 子どもの成長が楽しみである                  |
| X 4              | 私は子どもの生活リズムに合わせていると思う          |
| □ X 5            | 私は自分を犠牲にしていると思う                |
| □ X 6            | 子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなり,さびしい    |
| X 7              | 子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった   |
| X 8              | 夫婦間でのコミュニケーションはとれていると思う        |
| X 9              | 子どもが生まれて妻の成長を感じる               |
| X 10             | 子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う        |
| □ X 11           | 妻が私に何を期待しているのかわからず,イライラすることがある |
| □ X 12           | 育児についての妻からの期待は私には負担である         |
| □ X 13           | 子どもが生まれてから夫婦間にもめごとの機会が増えた      |
| □ X 14           | 妻の悩みを聞くのは負担である                 |
| □ X 15           | 子どもが生まれてからいろいろとやるが増えたので疲れ気味である |
| □ X 16           | 家事の手伝いは負担である                   |
| X 17             | 仕事への意欲が高まった                    |
| X 18             | 子どもが生まれてから私は忍耐強くなったと思う         |
| X 19             | 父親としての責任を感じる                   |
| X 20             | 子どものよき父親になりたいと思う               |
| □ X 21           | 子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする    |
| □ X 22           | イライラするとつい子どもにあたってしまう           |
| □ X 23           | 子どもが泣いていても,何を求めているかわからず困る      |

ばしばある;3点」,「いつもある;4点」の5件法で,得点が高いほど母の育児負担感が高いものを用いた。

## 4. 分析方法

K市の1歳6か月児健康診査の2006年8月～11月受診対象者1,462人に調査票を配布した。受診者1,283人(受診率87.8%)で,914人(回収率71.2%)から回答が得られた。そのうち,欠損値や父母の回答のミスマッチによる不適当データを除いた767人の有効回答(有効回答率83.9%)を分析対象とした。親性項目を「全くそう思わない;0点」,「あまりそう思わない;1点」,「まあそう思う;2点」,「非常にそう思う;3点」と得点化し,その合計点で分析した。なお,23項目のうち11項目は逆転項目である(表1)。さらに母の育児負担尺度も得点化したものを用いて,以下の1)～3)の方法で分析・検討した。

- 1) 親性項目を4つの因子「役割遂行への不適応感」「役割期待への負担感」「人間的成長・責任感」「児に対する親和性」と仮定して設定し,確認的因子分析を行い,検討をした。
- 2) 親性の4因子間での因果関係を仮定し,それぞれの関係について重回帰分析を行い検討した。
- 3) 親性因子と母の育児負担感との関連につ

いて因果関係を見ながら共分散構造分析によるパス解析を行った。

統計解析ソフトはSPSS11.0.J forWindowsおよびAmos5.0を用いた。

## 5. 倫理的配慮

調査は無記名の自記式とした。負担を最小限にするために項目数を絞り、回答はあくまでも対象者の意思決定を尊重し、拒否する権利を有し、拒否した場合の不利益は被らないこと、守秘義務を遵守すること、この調査結果を父親教室や子育てサービスを実施する際の内容を検討する基礎資料とすること以外への使用はしないことを明記し、厳封した返信による回答をもって承諾とした。

## IV. 結 果

### 1. 対象者の属性

対象者の年齢、1歳6か月児の出生順位、父の職業および母の仕事従事状況については、表3に示した。

#### 1) 年齢構成

父の年齢は、18歳が1人(0.1%)、20~25歳が53人(6.9%)、26~30歳が210人(27.4%)、31~35歳が313人(40.8%)、36~40歳が137人(17.9%)、41~45歳が47人(6.1%)、46~50歳が6人(0.8%)で、平均年齢は32.5歳(SD±5.1)であった。母の年齢は、17~19歳3人(0.4%)、20~25歳が76人(9.9%)、26~30歳が256人(33.4%)、31~35歳が329人(42.9%)、36~40歳が89人(11.6%)、41~45歳が14人(1.8%)で、平均年齢31.0歳(SD±4.4)であった。

#### 2) 1歳6か月児の出生順位

出生順位は、第1子が362人(47.2%)と約半数を占め、第2子306人(39.9%)、第3子87人(11.3%)であった。

#### 3) 父の職業および母の仕事従事状況

父の職業は、主に製造業が225人(29.3%)と多く、他には建設業115人(15%)、サービス業107人(14%)、鉱業11人(1.4%)であった。

また母の仕事への従事状況は、専業主婦が502人(65.4%)、パート・アルバイトが112人(14.6%)、常勤133人(17.3%)であった。

表3 対象者の属性 n=767

| 年齢            | 父    |         | 母   |         |
|---------------|------|---------|-----|---------|
|               | n    | %       | n   | %       |
| 10代           | 1    | 0.1     | 3   | 0.4     |
| 20～25         | 53   | 6.9     | 76  | 9.9     |
| 26～30         | 210  | 27.4    | 256 | 33.4    |
| 31～35         | 313  | 40.8    | 329 | 42.9    |
| 36～40         | 137  | 17.9    | 89  | 11.6    |
| 41～45         | 47   | 6.1     | 14  | 1.8     |
| 46～50         | 6    | 0.8     | 0   | 0       |
| 平均年齢          | 32.5 | SD ±5.1 | 31  | SD ±4.4 |
| 出生順位          | n    | %       |     |         |
| 第1子           | 398  | 51.9    |     |         |
| 第2子           | 279  | 36.4    |     |         |
| 第3子           | 79   | 10.3    |     |         |
| 第4子           | 10   | 1.3     |     |         |
| 第5子           | 1    | 0.1     |     |         |
| 父の職業          | n    | %       |     |         |
| 鉱業            | 11   | 1.4     |     |         |
| 建設業           | 115  | 15.0    |     |         |
| 農林漁業          | 2    | 0.3     |     |         |
| 製造業           | 225  | 29.3    |     |         |
| 運輸業           | 65   | 8.5     |     |         |
| 卸売小売          | 54   | 7.0     |     |         |
| 飲食店宿泊         | 17   | 2.2     |     |         |
| 医療福祉          | 41   | 5.3     |     |         |
| 教職            | 11   | 1.4     |     |         |
| 公務員           | 40   | 5.2     |     |         |
| サービス業         | 107  | 14.0    |     |         |
| 情報通信          | 21   | 2.7     |     |         |
| フリーター         | 4    | 0.5     |     |         |
| その他           | 54   | 7.0     |     |         |
| 母の仕事          | n    | %       |     |         |
| 専業主婦          | 502  | 65.4    |     |         |
| パート・<br>アルバイト | 112  | 14.6    |     |         |
| 内職            | 6    | 0.8     |     |         |
| 自営業           | 14   | 1.8     |     |         |
| 常勤            | 133  | 17.3    |     |         |

### 2. 父の親性項目の確率的因子分析

親性項目23項目を、先行文献や専門家間でのディスカッションにより、「役割遂行への不適応感(5項目)」、「役割期待への負担感(5項目)」、「人間的成長・責任感(8項目)」、「児に対する親和性(5項目)」に分類した。そして、項目間の相関が高すぎたり、質問内容として妥当でなかった7項目を削除し、4因子を16項目で構成した。これらの分類が妥当かどうかを確認するために内的整合性を示すCronbachの $\alpha$ 信頼係数をみると、順に $\alpha = .661 .773 .749 .697$ であり(表4)、これらを親性因子と仮定できると判断した。次にAmos5.0による確認

表4 親性4因子16項目

| 因子名       | $\alpha$ 係数 | 質問項目                                |
|-----------|-------------|-------------------------------------|
| 役割遂行への適応感 | 0.6606      | X 5 私は自分を犠牲にしていると思う                 |
|           |             | X 6 子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなり、さびしい     |
|           |             | X 15 子どもが生まれてからいろいろとやるが増えたので疲れ気味である |
|           |             | X 21 子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする    |
| 役割期待への負担感 | 0.7733      | X 11 妻が私に何を期待しているのかわからず、イライラすることがある |
|           |             | X 12 育児についての妻からの期待は私には負担である         |
|           |             | X 13 子どもが生まれてから夫婦間にもめごとの機会が増えた      |
|           |             | X 14 妻の悩みを聞くのは負担である                 |
| 人間的成長・責任感 | 0.7489      | X 7 子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった    |
|           |             | X 10 子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う        |
|           |             | X 17 仕事への意欲が高まった                    |
|           |             | X 19 父親としての責任を感じる                   |
|           |             | X 20 子どものよき父親になりたいと思う               |
| 児に対する親和性  | 0.6974      | X 1 私は、子どもへの愛情が深いと思う                |
|           |             | X 2 私は父親であることを楽しんでいる                |
|           |             | X 3 子どもの成長が楽しみである                   |

注) 分析方法として、表1の親性項目23項目(X 1～X 23)の中から質問項目として妥当でなかったもの7項目は削除し、その他の16項目を4つの因子に仮定してそれぞれまとめ、確認的因子分析を行った(表中の $\alpha$ 係数は、Cronbachの $\alpha$ 信頼係数を示す)。

的因子分析を行った結果を図1に示した。「役割遂行への不適応感」と「役割期待への負担感」( $r = .74$ ,  $p < .001$ )、「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」にそれぞれ強い相関( $r = .77$ ,  $p < .001$ )を示した。このモデルの説明力の程度を示す適合度指標  $GFI = .938$ , 安定性の程度を示す修正適合度指標  $AGFI = .915$  ( $GFI$ ,  $AGFI$  いずれも0.9以上であれば、そのモデルがデータをよく説明していると判断される<sup>22)</sup>)であった。また、 $RMSEA = .063$  (一般的に0.05以下であればモデルの当てはまりがよく、0.1以上だと当てはまりが悪いと判断される<sup>22)</sup>)であり、妥当なモデルであるとの結果を得た。

### 3. 親性因子間の関係

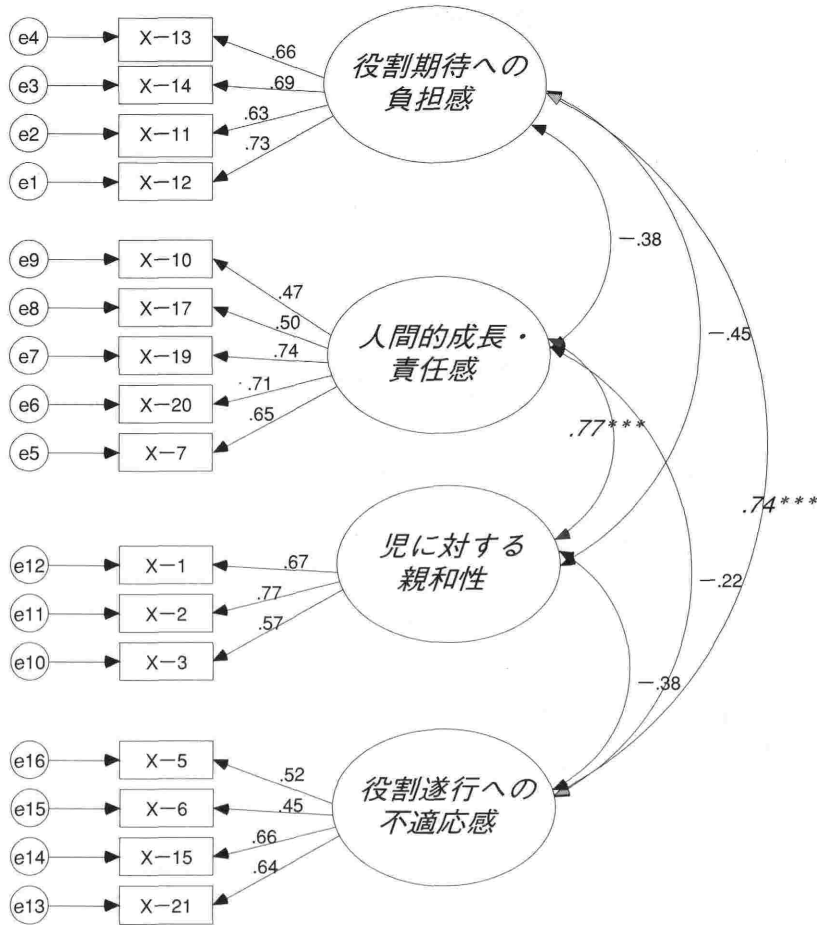
上記で確認できた親性4因子と、母の育児負担感との相関関係を見ると、4因子共に母の育児負担感との有意差があったが、かなり弱い相関であった(表5)。そこで、親性4因子のモデルを再検討した。すなわち、相関の強かった

因子間には、因果関係が認められるのではないかと仮定した。

結果として、図2に示すとおり「役割遂行への不適応感」と「役割期待への負担感」に強い因果関係( $\beta$ :標準偏回帰係数 = .78,  $p < .001$ )を認め、「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」にも因果関係( $\beta = .79$ ,  $p < .001$ )を示し、このモデルの適合度は  $GFI = .930$ ,  $AGFI = .905$ ,  $RMSEA = .067$ で、妥当なモデルだと判断した。

### 4. 母の育児負担感との関連

親性4因子と母の育児負担感について、共分散構造分析によるパス解析を行った。ただし、親性4因子を独立変数、母の育児負担感を従属変数とする因果モデルでは、「役割遂行への不適応感」と「役割期待への負担感」との因果関係があつて、「役割期待への負担感」と「母の育児負担感」には因果関係が認められた( $\beta = .29$ ,  $p < .001$ )。しかし、「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」間の、因果関係



【GFI=.938】【AGFI=.915】【CFI=.912】【RMSEA=.063】\*\*\* $p<.001$

図 1 親性 4 因子の確認的因子分析および相関関係

(GFI, AGFI いずれも 0.9 以上であれば、そのモデルがデータをよく説明していると判断され、一般的に 0.05 以下であればモデルの当てはまりがよく、0.1 以上だと当てはまりが悪いと判断される<sup>22)</sup>)

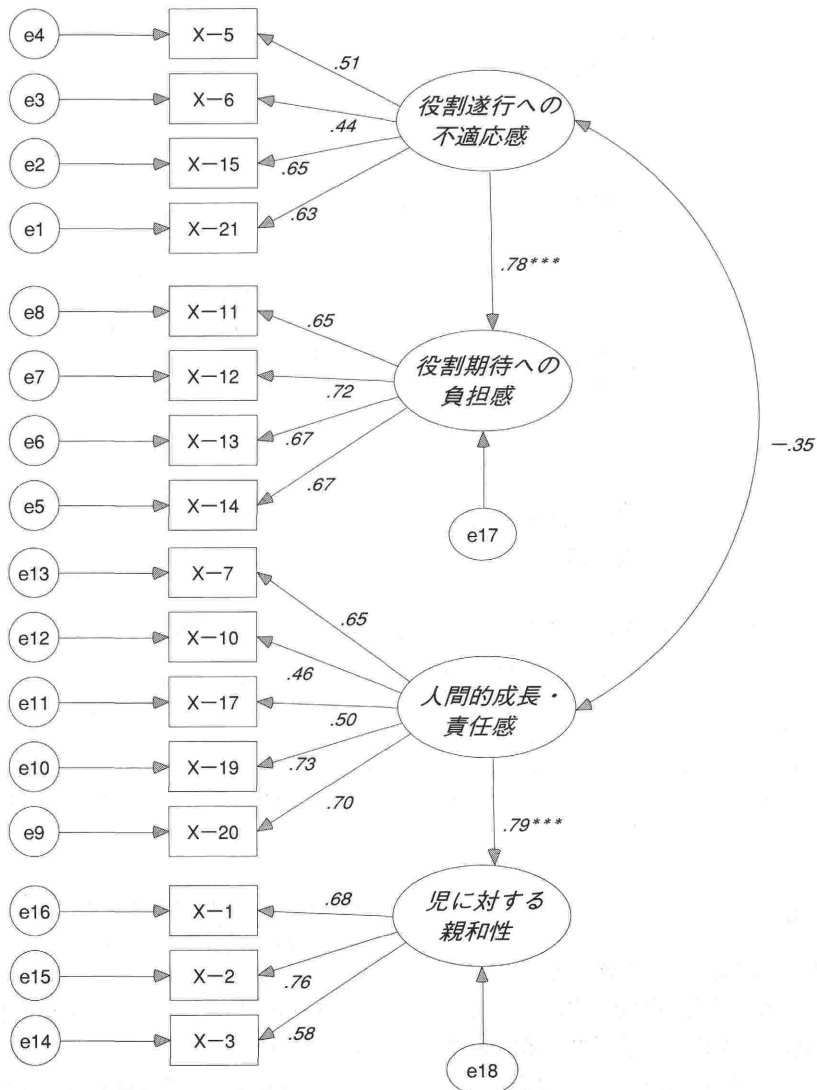
「役割遂行への不適応感」と「役割期待への負担感」( $r = .74, p < .001$ )、「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」にそれぞれ強い相関 ( $r = .77, p < .001$ ) を示している。

このモデルの説明力の程度を示す適合度指標 GFI = .938, 安定性の程度を示す修正適合度指標 AGFI = .915 であった。また、RMSEA = .063 であり、妥当なモデルである。

表 5 親性 4 因子と母の育児負担感との相関係数

|             | 母の育児負担感 | 役割期待に対する負担感 | 人間的成長・責任感 | 児に対する親和性 | 役割遂行への不適応感 |
|-------------|---------|-------------|-----------|----------|------------|
| 母の育児負担感     | —       | .27 **      | -.11 **   | -.18 **  | .25 **     |
| 役割期待に対する負担感 | .27 **  | —           | -.26 **   | -.32 **  | .51 **     |
| 人間的成長・責任感   | -.11 ** | -.26 **     | —         | .57 **   | -.16 **    |
| 児に対する親和性    | -.18 ** | -.32 **     | .57 **    | —        | -.26 **    |
| 役割遂行への不適応感  | .25 **  | .51 **      | -.16 **   | -.26 **  | —          |

\*\*  $p < .01$



【GFI=.930】 【AGFI=.905】 【CFI=.895】 【RMSEA=.067】 \*\*\* $p < .001$

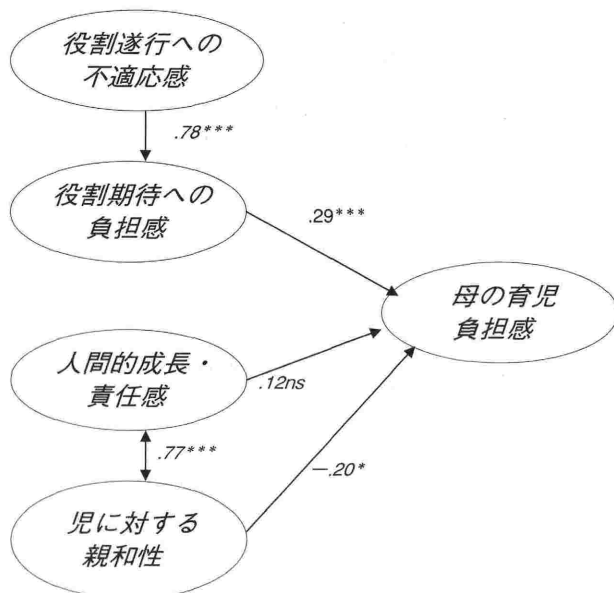
図2 親性因子間の因果関係

(GFI, AGFI いずれも0.9以上であれば, そのモデルがデータをよく説明していると判断され, 一般的に0.05以下であればモデルの当てはまりがよく, 0.1以上だと当てはまりが悪いと判断される<sup>22)</sup>)

「役割遂行への不適応感」と「役割期待への負担感」に強い因果関係 ( $\beta$ : 標準偏回帰係数 = .78,  $p < .001$ ) を認め, 「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」にも因果関係 ( $\beta = .79$ ,  $p < .001$ ) を示している。

を設定して母の育児負担感との関連をみると, 「児に対する親和性」とは有意差を示さず ( $\beta = -.08$ , n.s.), モデルのデータへの適合性が統計学的に不十分であった。そこで, 相関関係を設定したうえで, 母の育児負担感との関連をみると, 図3のとおり「人間的成長・責任感」は  $\beta = .12$  (n.s.) であったが, 「児に対する親

和性」は  $\beta = -.20$  ( $p < .05$ ) とやや弱い因果関係であるものの, このモデルの適合度が,  $GFI = .893$ ,  $AGFI = .869$ ,  $RMSEA = .063$  であり, 棄却できないモデル, すなわちモデルの妥当性が支持された。



【GFI=.893】【AGFI=.869】【CFI=.873】【RMSEA=.063】 \*\*\* $p < .001$  \* $p < .05$

図3 親性因子と母の育児負担感との関連

(GFI, AGFI いずれも0.9以上であれば, そのモデルがデータをよく説明していると判断され, 一般的に0.05以下であればモデルの当てはまりがよく, 0.1以上だと当てはまりが悪いと判断される<sup>22)</sup>)

「人間的成長・責任感」は $\beta = .12$  (n.s.) であったが, 「児に対する親和性」は $\beta = -.20$  ( $p < .05$ ) とやや弱い因果関係であるものの, このモデルの適合度が, GFI = .893, AGFI = .869, RMSEA = .063であり, 棄却できないモデル, すなわち適当なモデルといえる。

## V. 考 察

本研究では, 父の親性因子を明らかにし, それらと母の育児負担感との関連をみた。以下, 親性4因子の検討, 親性4因子間の因果関係の検討, 親性因子と母の育児負担感との関連の3点について考察する。

### 1. 親性4因子の検討

及川の親性発達尺度の構成因子や岩田らのストレス測定尺度<sup>14)</sup>, 小野寺らの父親になる意識構造因子などは<sup>6)</sup>, 妊娠期からの「父になること」へ焦点をあてていたため, 父になる喜びや実感, 不安が検討された因子内容であった。本研究では親性因子の確認的因子分析結果から, モデルの適合度も良い【役割遂行への不適応感】, 【役割期待への負担感】, 【人間的成長・責任感】, 【児に対する親和性】の4因子の妥当性が確認できた。この4因子は前述の先行研究の因子構造と同様のものを含んでいるが, 妊娠期

と1歳6か月期との相違があるため, 「父になってから」の親性因子として説明できるように, 因子名を命名した。

1つめの【役割遂行への不適応感】因子は「私は自分を犠牲にしていると思う」, 「子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなり, さびしい」, 「子どもが生まれてからいろいろとやることが増えたので疲れ気味である」, 「子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする」の4項目で構成した。父は何か担わなければならないと思っているが, 自分の思うようにならなかったり, 自分自身のことを主張できないジレンマを感じることがあり, それらは適応する前に否定的に捉えた結果の感情となっていると考えられる。1歳6か月児をもつ父親は, 親役割認知および自己との一致度や, 性役割に関する態度が関連する育児ストレスを感じている<sup>10)</sup>。父が役割遂行を漠然とでも認知をしているからこそストレスに感じるのではないか。そして, その認知した役割を肯定的にとるか, 否



定的ととるかで、その後に生じる感情も異なると推測される。つまり、小野寺の「制約感」<sup>6)</sup>、及川の「抑うつ因子」<sup>20)</sup>と同様の項目を本研究も含んでいるが、「制約感」だけでなく、それに伴う「抑うつ」でもない、それらを包含する広い概念としての【役割遂行への不適応感】が、親性因子として妥当だと考えた。

2つめの【役割期待への負担感】因子は、妻からの期待に対するプレッシャーを示す内容で、「妻が私に何を期待しているのかわからず、イライラすることがある」、「育児についての妻からの期待は私には負担である」、「子どもが生まれてから夫婦間にもめごとの機会が増えた」、「妻の悩みを聞くのは負担である」という4項目である。岩田<sup>14)</sup>はこれらの項目を父親役割への適応における父親ストレスの関連要因とした「夫婦関係」として説明している。確かに親性の発達には夫婦関係が影響し<sup>20)</sup>育児にも間接的に影響を与えるため<sup>16)</sup>、父の親性の要因としても夫婦関係の影響は否定できない。しかし夫婦関係自体が個人の人格的特性とする親性因子となり得ないのではないかと、「親性」に「夫婦関係」の因子が入ることには違和感があるのではないかと考え、本研究の場合は、「親性」定義においてもあくまで夫婦関係を前提とし、夫婦関係は親性に間接的に大きく影響するが含まれてしまうのではなく、前述の4項目は夫婦関係を基盤としてもたらされる【役割期待への負担感】とするのが妥当であると考えた。

3つめの因子【人間的成長・責任感】は、「子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった」、「子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う」、「仕事への意欲が高まった」、「父親としての責任を感じる」、「子どものよき父親になりたいと思う」の5項目で、すなわち親となつてからの責任を自覚する意識を示す項目で構成した。Grossmann, Pollack. & Golding や小野寺らも親として子どもを育てるには、社会人として自律して仕事を行い、責任をもって一家を支えていく自律性 (Autonomy) が不可欠であると述べており<sup>3,6)</sup>、【人間的成長・責任感】が最も良く合致していると言える。

最後の4つめの【児に対する親和性】因子は、

児に対する愛情を説明する「私は子どもへの愛情が深いと思う」、「私は父親であることを楽しんでいる」、「子どもの成長が楽しみである」という3項目である。子どもに対して思いやりや慈しみの気持ちと子どもへの愛情を認識し、子どもに対して肯定的に捉える気持ちだと言える。親和性 (Affiliation) という人格的要因は親意識に関連する<sup>3)</sup>ことから、親性因子として【児に対する親和性】が妥当であると判断した。

以上、この4因子を親性因子として、母の育児負担感との関連をみると、「役割期待に対する負担感」( $r = .27$ )と「役割遂行への不適応感」( $r = .25$ )は正の相関を、「人間的成長・責任感」( $r = -.11$ )と「児に対する親和性」( $r = -.18$ )は負の相関で有意差 ( $p < .01$ )を示した (表5)。しかし、有意差はあるものの相関係数が低く、関連は弱いと考えられることから、親性4因子間で強い相関を示しているものは因果関係が仮定できるのではないかと考えた。つまり、「役割遂行への不適応感」と「役割期待への負担感」、「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」がそれぞれ何らかの影響を及ぼしていると考えられた。

## 2. 親性4因子間の因果関係の検討

「役割遂行への不適応感」と「役割期待への負担感」の関係は  $\beta = .74$  ( $p < .001$ ) で因果関係が有意に示された。このことは、「役割遂行への不適応感」があることで、期待される役割が負担であると感じることを示すと考えられる。父親が育児にその役割を果たすためには男性性が重要な要因であり、この男性性は父性にも大きく関与している<sup>18)</sup>。当然、男性性・父性性を含めた検討の余地は残すが、親性には父親自身の役割への認識やそれに伴う感情を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかによって、2つの因子の因果関係を示す内容も否定的か肯定的か、偏りを生じると考える。

次に「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」との間には、因果関係ではなく、相関関係とした方が  $r = .77$  ( $p < .001$ ) で相関関係を有意に示し、かつモデルの適合度が良かったという結果であった。父が「人間的成長・責任感」を認識していれば、「児に対する親和性」

が高まるだけでなく、「児に対する親和性」が高まるにつれて責任感を自覚し、人間的に成長したことを実感すると考えられた。小野寺らは、親和性と自律性が高い男性は、父になる自信も高く、親和性と自立性をバランスよく持っていることが、親となってからの家庭と仕事の両立に重要である<sup>6)</sup>と報告している。父が感じる責任感とは、社会的な自覚を意味しており、自分が家族を守るという認識や子どもへの慈しみやかわいいと思う親和性を持ち備えていく中で、社会の中における自分の立場を自覚し、それに伴う仕事への意欲へと関連していくのであろう。したがってこの2因子には因果関係ではなく、相関関係を認めるとしたほうが良いと推察する。

### 3. 親性因子と母の育児負担感との関連

「人間的成長・責任感」と母の育児負担感との関係に有意差がなかったことから、「人間的成長・責任感」と「児に対する親和性」とは相関関係を持ち、間接的に影響すると考えられる(図3)。先述のように、父の親性因子のうちの「役割期待への負担感」と「児に対する親和性」が母の育児負担感に影響を及ぼす傾向にあった。特に父の役割期待への負担感が強いと、母の負担感を一層増強する傾向にあった。母親は、父親が育児に責任を持っていないと確信するようになれば、ますます育児に強い責任を感じる<sup>23)</sup>。しかし「一緒に育児」していくのだという安心感が母の育児負担感を緩和させ、望ましい育児態度をとることができる<sup>25)</sup>。父が児に対して肯定的な思いをもっているのか、父親としてわが子が愛情を注ぐ対象となっているのかを母が感じ得ることで「一緒に育児をしている気持ち」が持てるのである。丸山らも、父の対児感情がネガティブであり、児へのかかわりが希薄になるということが母に育児負担を集中させ、母自身の育児への前向き感情も減少させてしまうとしており<sup>26)</sup>、本研究も父の「児に対する親和性」が低いために母の育児負担感が増強する傾向という結果から、同様であると解釈できる。これらは、父の物心両面からの支援の必要性の精神的な支援の部分である<sup>5)</sup>。母はたとえ父から直接的な育児援助を受けていなくて

も、精神的な支援があれば、母の育児負担感は一層軽減されると考えられる。このように精神的結びつきをも示す夫婦関係は間接的に育児に影響を与えるため<sup>16)</sup>、親性因子というよりも、親性の潜在的かつ基盤としたうえで、親性因子が母の育児負担感へ影響を及ぼすと考える。以上、父の親性因子と母の育児負担感への影響から、父の親性因子を構成している要素に対して、具体的に対応・支援していく必要とそれらを父親の教育プログラムに反映させる項目としても注目できることの示唆を得た。

父の親性については、父性性や男性性が根底にあり、それらに自己概念(自己像)や自分の親との関係、養育体験などが絡み合っている<sup>16)</sup>。しかし、本研究では考慮していないため、父の親性因子の一部を明らかにしたにすぎず、かつ母の育児負担感にはさまざまな影響要因があると考えられる。よって、縦断的かつ系統的に調査しつつ、母の育児負担感との関連を検討する必要がある。

## VI. 結 論

### 1. 結 語

- 1) 父の親性因子としては、「役割遂行への不適応感」、「役割期待への負担感」、「人間的成長・責任感」、「児に対する親和性」の4つの下位概念が想定できる。
- 2) 「役割遂行への不適応感」があると「役割期待への負担感」を認知するという因果関係が想定できることが立証できた。
- 3) 「人間的成長・責任感」を強く認知している父は、「児に対する親和性」が高まり、またその逆もあるという強い相関関係が実証的データによって支持された。
- 4) 母の育児負担感に影響を及ぼす父の親性因子は、「役割期待への負担感」と「児に対する親和性」という2つの因子に集約されることが支持された。
- 5) 父の親性因子として、母の育児負担感が緩和される傾向を示す因子構造が明らかになり、この因子を助長・促進するような関わりや教育プログラムの検討項目としての示唆が得られた。

以上のことから、父の親性が育つには、親と

なってからの仕事と家庭の両立という社会的な責任感の自覚が持てるように、身近な人からのアドバイスを受けていく機会を得られることが大きい。また、父親の役割だと認識する内容や事柄については、肯定的に捉えることができるよう、育児参加について、具体的に、父親自身ができそうだと思うことから取り組むように助言することが重要である。そのことによって、役割遂行への不適応感や役割期待への負担感が増強されることなく、父の親性が育つことの一助となるのである。

## 2. 本研究の限界と課題

先行文献からも、他に夫婦関係や子どもと関わることの質や量、経験などが関連することが考えられるため、本研究で明らかになった因子だけで親性というものをすべてを説明しているとは言えない。また使用した調査票は、父と母の質問を同一質問紙で行ったため、回答の誘導や父の質問項目を母が回答している可能性を否定できない。子どもを持って1歳6か月の時点での横断的な結果であり、今後子どもが成長・発達するうえでの母の育児負担感の程度がどのように変化し、それに伴い父の親性がどう変化していくかはわからない。さらに、母の親性について、今回は触れていないため、母の親性と父の親性との関連についても考慮し、縦断的に追跡することが課題であると考えられる。

## 謝 辞

本研究の対象となって下さいました1歳6か月児健診対象の父母の皆様、また本調査の実施にあたりご協力・ご助言いただきました管轄保健所の皆様に心よりお礼申し上げます。

また、研究の過程において英語文献の理解を助けて下さいました元岡山県立大学保健福祉学部沼本健二助教授に心より感謝いたします。

最後に、暖かく熱心にご指導いただきました岡山県立大学大学院二宮一枝教授、関西福祉大学小野ツルコ教授に深謝申し上げます。

本研究は、岡山県立大学保健福祉研究科博士(前期)課程修士論文に一部修正を加えたものです。

## 文 献

- 1) 平成18年「第3回全国家庭動向調査」, 国立社会保障・人口問題研究所.
- 2) Cronenwett, L.R., & Kunst-Wilson, W. Stress and social support and the transition to fatherhood. *Nursing Research*. 1981; 30: 196-201.
- 3) Grossmann, F.K., Pollack, W.S., & Golding, E. Fathers and children: Predicting the quality and quantity of fathering. *Developmental Psychology*. 1998; 24: 82-91.
- 4) 牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—. *家庭教育研究所紀要* 1985; 6: 11-24.
- 5) 岡本絹子. 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究. *小児保健研究* 2002; 61 (5): 692-700.
- 6) 小野寺敦子, 青木紀久代, 小山真弓. 父親になる意識の形成過程. *発達心理学研究* 1998; 9(2): 121-130.
- 7) 中添和代, 舟越和代, 白石裕子. 働く母の育児不安—夫の育児サポート意識との関連—. *地域環境保健福祉研究* 2003; 6 (2): 39-46.
- 8) 住田正樹, 中田周作. 父親の育児態度と母親の育児不安. *九州大学大学院教育学研究紀要* 1999; 2: 19-38.
- 9) 五十嵐久人, 飯島純夫. 父親の育児参加への意識と育児行動. *山梨医大紀要* 2001; 18: 89-93.
- 10) 桑名行雄, 桑名佳代子. 1歳6か月児をもつ父親の育児ストレス—親役割認知および性別役割態度との関連—. *こころの健康* 2006; 21 (1): 42-54.
- 11) 清水嘉子. 父親の育児ストレスの実態に関する研究. *小児保健研究* 2006; 65 (1): 26-34.
- 12) 住田正樹. 母親の育児不安と夫婦関係. *子ども社会研究* 1999; 5: 3-20.
- 13) 川井 尚. 幼少期の育児における父親の役割. *子ども家庭福祉情報* 1996; 12 (8): 25-30.
- 14) 岩田裕子, 森 恵美, 前原澄子. 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因. *日本看護科学学会誌* 1998; 18 (3): 21-36.
- 15) 岡本絹子. 1歳6か月児を持つ父親の抑うつ症状と関連要因. *小児保健研究* 2005; 64 (4): 560-569.

- 16) 川井 尚, 安藤朗子, 武島春乃, 他. 父親の役割に関する基礎的研究—母親の役割とも比較して—. 日本子ども家庭総合研究所紀要 2006; 42: 177-190.
- 17) 三宅恵美. 妻の妊娠後期における夫の父性意識. 岡山県立大学大学院修士論文 2003.
- 18) 柏木恵子編著. 父親の発達心理学—父性の現在とその周辺— 1994: 150.
- 19) 社会心理学小辞典. 古畑和孝編. 有斐閣. 1994.
- 20) 及川裕子. 親性の発達尺度の作成を試みて. ウーマンヘルス学会誌 2005; 4: 93-102.
- 21) 中嶋和夫, 斉藤友介, 岡田節子. 母親の育児負担感に関する尺度化. 厚生指標 1999; 46 (3): 11-18.
- 22) 小塩真司. 研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析. 東京図書. 2005.
- 23) 二宮恒夫. 夫が「父親」になるためのサポート. 助産婦雑誌 1995; 49 (7): 537-542.
- 24) 樋口広美, 坪川トモ子, 高橋裕子, 他. 育児実態調査から見た子ども虐待のハイリスク要因—子ども虐待を早期発見・予防するために—. 保健師ジャーナル 2004; 60 (10): 1006-1013.
- 25) 牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の生活とく育児不安>. 家庭教育研究所紀要 1982; 3: 34-56.
- 26) 丸山彩香, 亀田幸枝, 島田啓子, 他. 軽度の虐待傾向に関与する両親間における対児および育児感情の相互関係. 子どもの虐待とネグレクト 2005; 7 (2): 222-228.
- 27) 鯨島雅子. 父親と母親における子どもの誕生に伴う「親性」の心理的変容 (1) —「親性」尺度の作成と因子構造の検討—. 日本看護研究学会雑誌 1999; 22 (5): 23-34.
- 28) 新谷百合子, 村松美紀子. 親の変化とその規定因に関する一研究. 家庭教育研究所紀要 1993; 15: 129-140.
- 29) 及川裕子. 親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討. ウーマンヘルス学会誌 2005; 5: 81-91.
- 30) 柏木恵子, 若松素子. 「親となる」ことによる人格的発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994; 5 (1): 72-83.

### [Summary]

The purpose of this study was to identify factors comprising paternity, and examine the relationships between these factors and the burden of child-raising perceived by mothers. We conducted a survey involving 1,462 parents of infants aged eighteen months old, and collected 767 valid responses. Employing confirmatory factor analytic procedures and covariance structure analysis, we performed path analysis of twenty-three items related to paternity, their basic attributes, and the burden of child-raising perceived by mothers, measured based on the Parenting Strain Index (developed by Nakajima et al.).

Four factors associated with paternity: "unsuitability of playing paternal roles", "burden of playing expected paternal roles", "personal development and the sense of responsibility", and "affinity towards children", and sixteen related items were extracted. A correlation was observed between the "burden of playing expected paternal roles" and that of child-raising perceived by mothers, and other causal relationships were also shown between factors.

### [Key words]

paternity, role, burden of child-raising perceived by mothers, infants aged eighteen months old